

PR Jackery Japan

ポータブル電源が灯した希望 「その日」に備える防災の必需品

2024/9/24



ポータブル電源を用いて支援活動にあたる様子

2024年の年明けに起きた能登半島地震では、電力の復旧が遅れ、被災者は長期間にわたって不自由な生活を強いられました。明かりもつかず、充電もできない。スマホが使えないことで、家族に生きていることすら伝えられない。そんな被災者の苦境を救ったのが、「Jackery(ジャクリ)」のポータブル電源だった。

一瞬で崩れた日常

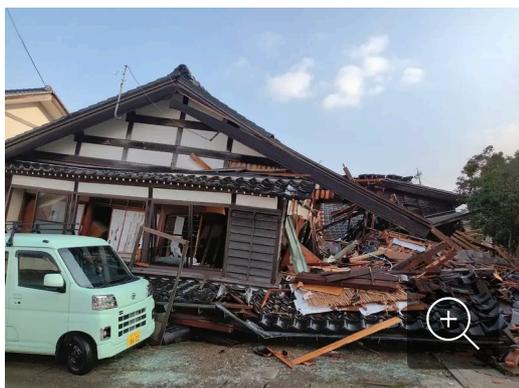
それは経験したことのない揺れだった。

「自分がおもちゃにされて、小さな子に振り回されているような感覚でした」

石川県能登町に住む森進之介さん(44)は、2024年1月1日に起きた能登半島地震の揺れを、そう表現する。

午後4時10分。自宅にいた森さん一家6人は最大震度7の地震に襲われた。直前まで家族団らんの寝正月を過ごしていた。4分前の「前震」に危険を感じ、避難を始めようとしていた矢先だった。

轟音とともに瓦ぶき家屋の1階部分が倒壊した。居間にいた森さんは梁に押しつぶされた。痛みはなかったが、感触で腰骨が折れるのが分かった。



森進之介さんの倒壊した自宅の様子

身動きが取れない中で、家族の安否を探った。妻や長女、三男の無事は声で分かった。長男は2階にいて難を逃れた。ただ次男で中学1年の銀治郎さんからの応答がなかった。

「銀治郎。大丈夫か。銀治郎」

意識を失いそうになりながら、何度も次男の名を呼んだ。

電波拾えても充電できず

能登半島地震による建物の被害は、一部損壊を含めて、10万戸に及んだ。電気や水道、通信などのインフラも壊れ、5万人もの人々が避難生活を余儀なくされた。

石川県珠洲市のアーティスト、竹下あづささん(37)もその一人だった。



[→被災地で活躍したJackery商品はこちら](#)

自宅の倒壊こそ免れたが、柱が大きく傾いた。夫と2人で身を寄せた避難所は、被災者であふれかえっていた。体を横たえるスペースもなく、自家用車の中で夜を明かす人も多かったという。

停電は能登半島から明かりを奪った。夜は人々が家から持ち出した懐中電灯とスマホの照明だけが頼り。「日が暮れると何もすることができず、寝るしかなかった。こんなに夜

が暗く、長いなんて思わなかった」

スマホの電波は車で15分ほど走った市役所の近くで拾えた。ただ、充電するすべが限られていた。手回しの充電器では、へとへとになるまで回しても数%しかたまらない。車でも充電はできたが、ガソリンメーターとのにらめっこだ。竹下さんは被災直後から、各地の避難所に支援物資を届ける手助けを始めていた。ガス欠だけは避けたかった。

「食べるものが乏しく、トイレも流れない。ガソリンはどんどん減っていく。避難所によってはギスギスした雰囲気だった」

発災から5日。支援の遅れもあり、被災地には不安が広がっていた。

被災地に灯した希望

1月6日。災害支援活動に取り組む非営利団体「四番隊」の伊藤純さん(50)は、凹凸だらけの道路を北上していた。ワゴン車の荷台には、石川県輪島市門前町の避難所に届けるためのポータブル電源が4台積み込まれていた。



Jackeryの商品を受け取る伊藤純さん(右から2番目)

発災直後に一度、現地に入っていた。食料などの支援物資を届けつつ、現地のインフラ事情や支援のニーズを探った。必要な物資をそろえるために一度、拠点のある関東に戻ったところ、Jackeryから「ポータブル電源を届けてほしい」との申し出を受けた。

ポータブル電源のリーディングカンパニー「Jackery」の日本法人である株式会社「Jackery Japan」(本社:東京都中央区)は、発災直後から、能登半島地震の被災地支援を始めた。災害支援団体や現地の支援者を通じて、合計で260台のポータブル電源とソーラーパネル(計2400万円相当)を現地に無償提供した。

→Jackery Japan 令和6年能登地震支援活動報告はこちら

伊藤さんは「これまでの経験から、水や食料は数日で届くようになる。ただ電気は遅れる。能登の場合はかなり時間がかかりそうだったので、Jackeryさんの申し出はありがたかった」と話す。



避難所にはあらかじめポータブル電源を持って行くことを伝えていた。現地に着くと、待ち望んでいた被災者たちが飛び出してきた。自費で調達しておいた衛星通信用の機材を電源に接続した。方々で「スマホが繋がった」という歓声が上がった。



スマートフォンの充電ができ、安心する被災者

能登半島地震では、道路が寸断され、通信障害も発生したことで、親族に安否を伝えることができず、「行方不明者」になっている人が大勢いた。伊藤さんは「人が生きていく上で、人とのつながりは欠かせないが、災害ではそのつながりが断ち切られる。安否を伝えられず、みんなが不安を抱えていた」と振り返る。

「生きとる。生きとるぞ。元気やぞ」。ポータブル電源の周りで「生存連絡」の電話をかける光景が広がった。遠方に住む娘や息子に。孫たちに。みんな、涙を流しながら、無事の知らせを届けていた。

珠洲市の竹下さんの避難所には、1月10日ごろにJackeryのポータブル電源とソーラーパネルが届いた。「避難所では燃料や食料が減る一方だった。だからソーラー充電でポータブル電源の残量を示す%表示が増えていく様子に心強さを感じました」と話す。

ポータブル電源とソーラーパネルは避難所に「希望」を灯した。

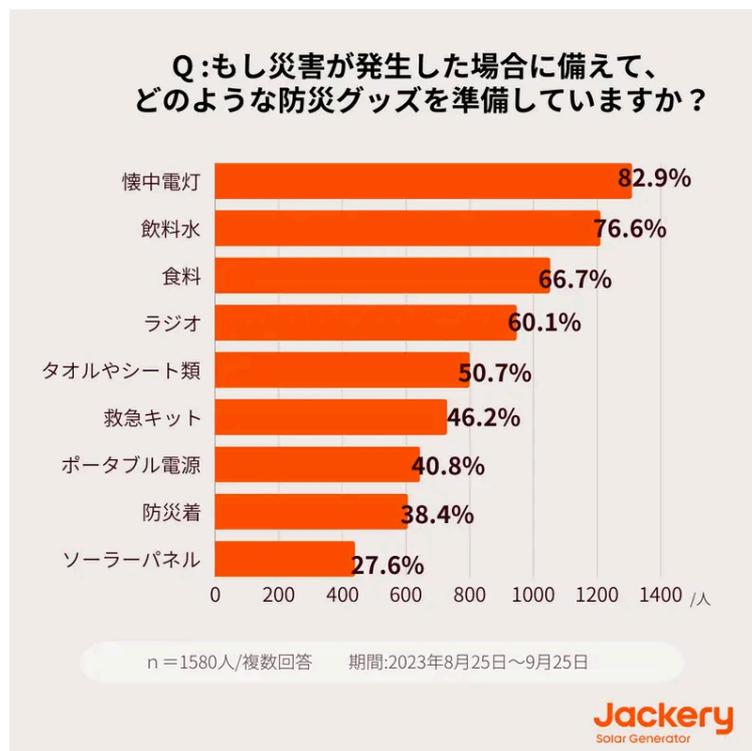
その日に備える

気象庁は8月8日、宮崎県で最大震度6弱を観測する地震の発生を受け、「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」を発表した。被害が想定される地域では、量販店に防災グッズを買い求める人が列をなした。「その日に備える」という意識が高まっている。

Jackeryが2023年に実施した「防災意識に関するアンケート調査」では、「どのような防災グッズを準備していますか」という質問に対し、最も多かった回答が「懐中電灯」(回答者の82.9%)で、「飲料水」(76.6%)、「食料」(66.7%)という回答が続いた。一方で「ポータブ



ル電源」と答えた人も40・8%に上り、一定数の人が被災時の電力確保について考えている様子がうかがえる。



→「防災意識に関するアンケート調査」はこちら

珠洲市の竹下さんは「能登半島ではずっと地震が続いていて物資は備蓄していたが、電気までは頭が回らなかった。ポータブル電源があると安心感が違う。今回の経験を通じて、一家に一台は必要だと感じた」と振り返る。

被災者の心にも寄り添う

あの日、森さんは倒壊した自宅から救助された後、町内の病院に搬送された。腰の骨を折る重傷だった。その病室で次男の銀治郎さんが亡くなったことを知らされた。

「5分も間が空くと、正気を保ってられなかった」

森さんは入院中、スマホの通信アプリ「LINE」を使って、被災地支援のコーディネーターに没頭したという。食べ物が少ない避難所があると聞けば、その情報を知人に伝え、余っている物資があれば分配先を探し回った。Jackeryのポータブル電源を避難所に手配するのも手伝った。支援に関わっている間だけは、悲しみを紛らわすことができた。

森さんは言う。

「銀治郎が喜ぶことはなんだろう、と考えると、たぶん、仲が良かった同級生とか、世話を焼いてくれた近所のじじ、ばばたちが笑顔になることだと思うんです。地震で大きな被害を受けたけど、みんなが住み

続けたいという町に戻ることができれば、あいつも喜ぶんじゃないかなって」

能登町の森さんは今、震災前からの移住サポートの仕事に加え、町の復興支援に携わっている。



大きな被害を乗り越え、復興支援に力を注ぐ、森進之介さん(中央)

→Jackeryが選ばれる理由とは

暮らしに安心を備えよう 「Jackery ポータブル電源 2000 New」

いつ起きるか分からない災害への備えとして、関心が高まっているポータブル電源。そのリーディングカンパニー「Jackery」の新製品「Jackery ポータブル電源 2000 New」は小型で大容量という特徴に加え、普段使いもできる優れ物だ。



スマホなら80回の充電ができる大容量(定格出力2200W/瞬間最大4400W)で、ほとんどの家電にも対応している。液晶テレビであれば25時間、冷蔵庫であれば最大72時間の給電できる。同じ2000Whの市場モデルより40%小さく、重量も34%軽い。場所をとらず、持ち運びもしやすいという利点がある。

充電したまま家電を使える「パススルー機能」にも対応している。普段から冷蔵庫などの家電に接続しておくことで、いつでもフル充電の状態を保っておくことができる。停電時にはバックアップ電源の役割を果たすほか、非常時に持ち出せば、3～5人の家族で3日間程度の電力を確保することができる。ソーラーパネルも備えておけば充電切れの心配もない。

地球温暖化の影響で自然災害の大規模化が懸念されている。いったん被災すれば、長期の避難生活を強いられる恐れがある。Jackeryのポータブル電源で、暮らしに安心を備えよう。



→Jackeryポータブル電源新商品はこちら

■会社概要

会社名：[Jackery Japan\(ジャクリジャパン\)](#)

所在地：東京都中央区

ポータブル電源のリーディングカンパニー「Jackery」は、「グリーンなエネルギーをあらゆる人に、あらゆる場所に提供する」というビジョンのもと2016年にアメリカ・カリフォルニアで誕生した。世界累計販売台数は400万台。日本市場への参入は5年目で、充実したアフターサービスが好評を博している。誕生以来、多くのキャンプ愛好家たちから親しまれてきたが、近年は災害支援プロジェクト「[Jackery Care](#)」を展開。災害支援団体や被災地へのポータブル電源提供、防災啓発活動に力を入れている。

能登での大雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と、一日も早い復興を心より祈念いたします。Jackeryも、CSR活動プロジェクト「Jackery Care」の一環として、災害時の救助活動などを行う支援団体を今後もサポートしてまいります。